

東畠屋遺跡2
—4次調査の成果—
Higashihataya Site
The 4th excavation report

浜松市教育委員会

2019年3月

Hamamatsu Municipal Board of Education, March, 2019



例　言

- 1 本書は静岡県浜松市東区有玉南町 1284-1、1287-1、1290 の各一部における東畠屋遺跡 4 次調査の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、宅地造成事業に伴う道路拡幅工事（公道移管部分）に先立ち実施した。現地発掘調査及び整理作業・報告書刊行作業は、土地所有者からの依頼を受けて、浜松市教育委員会（浜松市民部文化財課が補助執行）が実施した。調査の費用は土地所有者が負担した。
- 3 発掘調査の面積と期間は、以下の通りである。

調査面積	60.5 m ²
調査期間	現地調査 平成 30（2018）年 10 月 22 日～10 月 29 日
	整理作業 平成 30（2018）年 12 月 3 日～平成 31（2019）年 3 月 15 日
- 4 発掘調査及び本書の執筆・編集は、鈴木京太郎（浜松市民部文化財課）が担当し、小杉直孝（同）・安川あや（同）・山崎明日香（同）が補佐した。
- 5 調査にかかる諸記録及び出土遺物は、浜松市民部文化財課が保管している。
- 6 本書の作成にあたり、松井一明氏からご指導を賜った。記して深謝したい。

凡　例

- 1 地図における方位は真北、標高は海拔である。
- 2 遺物の実測図における番号と、写真図版における番号は同一である。なお、調査区は 3 分割しているが、遺構・遺物番号は通じて付番した。
- 3 本書で報告する土器の断面と種別は以下の通りである。

□ 土師器・土師質土器	■ 灰釉陶器・山茶碗・中世陶器	■ 貿易陶磁器
-------------	-----------------	---------
- 4 本文中の引用文献の表記については以下のように略す。

(財) 浜松市文化協会→浜文協 教育委員会→教委
(財) 浜松市文化振興財団→浜文振 (財) 静岡県埋蔵文化財調査研究所→静埋研

目　次

例　言・凡　例・目　次

第 1 章 序　論	1
第 2 章 調査の成果	3
第 3 章 総　括	11

図　版

第1章 序論

1 調査の経緯と経過

調査の経緯 東畠屋遺跡は、天竜川沖積平野に立地する古墳時代～中世の遺跡である。2000年に消防署建設に先立つ本発掘調査（1次調査）が実施され、鎌倉時代を主体とする集落跡を確認している（浜文協 2001）。また、2013年の住宅建設に伴う予備調査（2次調査）でも山茶碗等が出土するなど、遺構・遺物が良好に残存していることが明らかとなった（浜松市教委 2015）。

そうした中、2017年に遺跡の北西部において宅地造成の計画が浮上し、2018年1月に予備調査（3次調査）を実施した（浜松市教委 2019）。この調査で、宅地造成計画地の南東部で遺構・遺物が確認されたため、開発側と協議を行い、道路拡幅工事箇所の一部で本発掘調査を行うことになった。

調査の経過 現地調査は2018年10月22日から10月29日まで実施した。電柱等の支障物が存在したため調査区は3分割となった。調査面積は合計約60.5m²である。22日に重機による表土掘削、22～23日に包含層掘削と遺構精査、24～25日に遺構掘削、26・29日に写真撮影と測量を行った。写真撮影には、中判カメラ（リバーサルフィルム）とフルサイズのデジタルカメラを用いた。

2 遺跡周辺の環境

地理的環境 東畠屋遺跡は天竜川沖積平野の北東～南西方向に細長く形成された微高地に立地する。かつての天竜川は幾筋にも分流しており、遺跡の立地する微高地は、そうした小河川の流れにより形成されたものである。現在の遺跡周辺は、1960年代頃の土地改良事業によって整然とした土地の区画が行われているが、この微高地だけは、今も地形に沿った北東～南西方向に集落が営まれ、古い道筋も残るなど往時の景観がうかがえる。

また、遺跡西側にはかつて天竜川の本流だった時期もある馬込川が流れ、遺跡南側には東海道の脇街道である本坂道（姫街道）も通っており、水陸の交通利便性が高い地域であった。

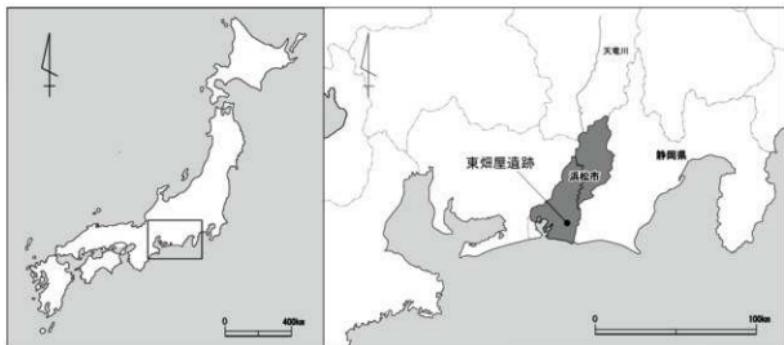


Fig.1 東畠屋遺跡の位置

歴史的環境 当遺跡の北西側では、西畠屋遺跡（2）で旧河道から奈良時代を中心とする大量の土製模造品等の祭祀遺物が出土しており注目されるが、それ以外に当遺跡近隣の遺跡分布は希薄であり、河川の流れなどにより不安定な土地であったと推測される。

周囲に目を向けると、西側の三方原台地および高中位の河岸段丘上には欠下平遺跡（21）などの縄文時代の集落跡や、千人塚平A～D古墳群（13～16）・瓦屋西A～D古墳群（6・8）・宇藤坂ABC古墳群（24）などの中後期の古墳群等が立地する。南東側の平野部では、弥生時代後期の集落跡が確認されている田見合遺跡（30）や、弥生時代～古墳時代の水田跡が確認されている箕輪遺跡（29）など、弥生時代～古代を主体とする遺跡が点在している。

Tab.1 周辺の遺跡一覧

1 東畠屋	古墳～中世	12 千人塚平	縄文	23 北平古墳群	古墳
2 西畠屋	古墳・古代・中世	13 千人塚平A古墳群	古墳	24 宇藤坂ABC古墳群	古墳・古代
3 平田山CDEF古墳群	古墳	14 千人塚平B古墳群	古墳	25 萩町古墳群	古墳
4 瓦屋西	弥生	15 千人塚平C古墳群	古墳	26 一本杉古墳群	古墳
5 瓦屋西Ⅰ	縄文	16 千人塚平D古墳群	古墳	27 幸古墳群	古墳
6 瓦屋西AB古墳群	古墳	17 千人塚	縄文	28 四ヶ池古墳群	古墳
7 瓦屋西Ⅱ	旧石器・縄文・中世	18 千人塚古墳群	古墳	29 箕輪	弥生～古代
8 瓦屋西C古墳群	古墳	19 神明平	古代	30 田見合	弥生・古墳
9 地蔵平	縄文	20 神明平古墳群	古墳	31 別所前	弥生・古墳
10 地蔵平AB古墳群	古墳	21 欠下平	縄文	32 別所東	古代
11 下の谷古墳群	古墳	22 欠下城跡	中世	33 西脇前	古代

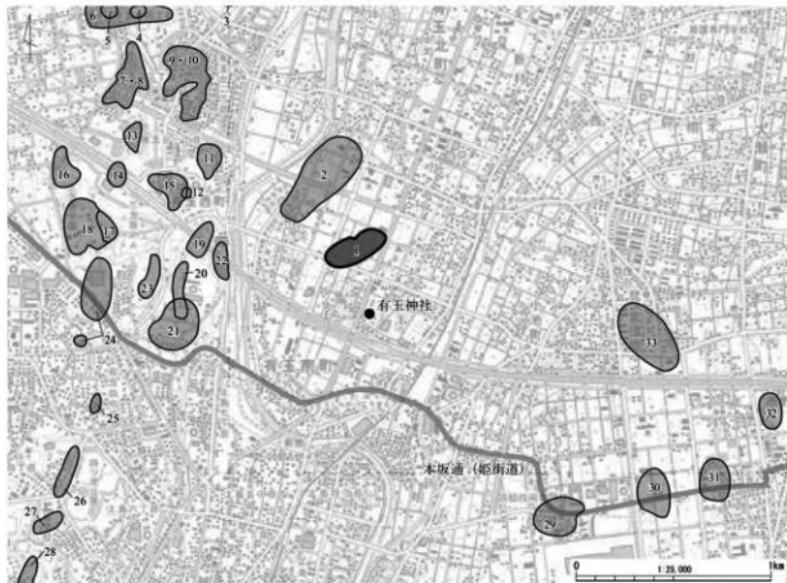


Fig.2 周辺の遺跡分布図

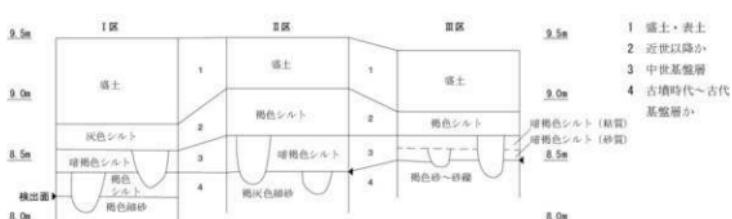
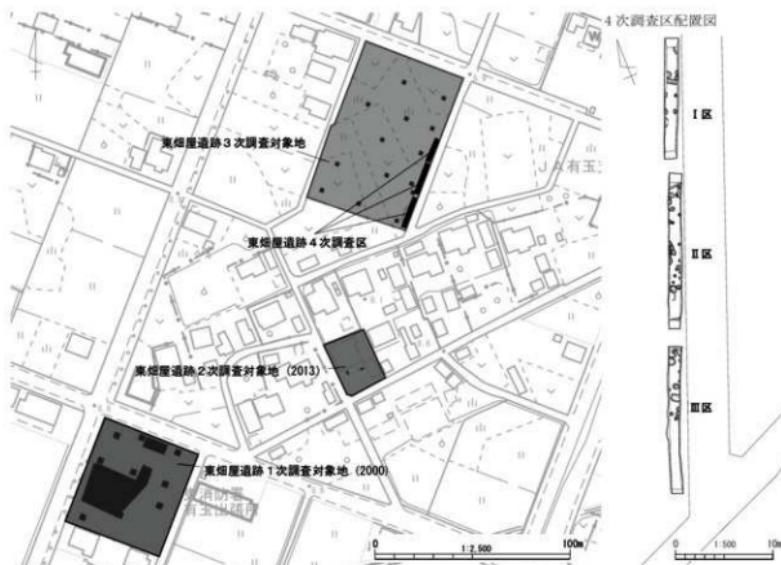
第2章 調査の成果

1 調査の概要

調査対象地は、幅が約1.5mと狭小であり、北からI区、II区、III区に分割して調査を行った。調査区の面積は、I区が17.5m²、II区が22m²、III区が21m²で合計60.5m²である。

土層の基本層序は下図のとおりである。本来の中世の遺構面は3層上面であるが、古代以前の遺構面とみられる4層上面で遺構検出を行ったため、一部の中世遺構は壁面の土層で確認した。

遺構は、土坑21基、溝1条、小穴28基を確認した。遺物は、古墳時代後期～室町時代までの時期で確認したが、大半が鎌倉時代前半のかわらけと山茶碗である。



2 調査の成果

(1) I 区の調査成果

遺構 土坑 6 基、溝 1 条、小穴 3 基を検出した。本来ならば中世の検出面は 3 層上面、古代以前の検出面は 4-1 層上面であるが、層位の見極めが困難であり 4-2 層上面にて遺構検出を行った。

SK01 は 4-1 層上面から掘り込まれており古代以前の遺構とみられるが遺物は出土していない。SK02・SK03 は調査区東壁際で検出された。SK02 が SK03 を切っているがいずれも 3 層上面から掘り込まれており、山茶碗やかわらけを出土している。SK05・SK06 は調査区西壁際で隣接して検出されている。ともに 3 層上面から掘り込まれており、かわらけが多数出土している。

SD01 は調査区を横断するように検出されている。確認できる部分で長さ 120 cm、幅 46 cm、深さ 40 cm を測る。4-1 層上面から掘り込まれており古代以前の遺構とみられる。

SP02 は土師器が 1 点出土しており 8 世紀頃の遺構とみられる。SP03 は 4-1 層から掘り込まれて土師器を 1 点出土しており、7 世紀頃の遺構とみられる。

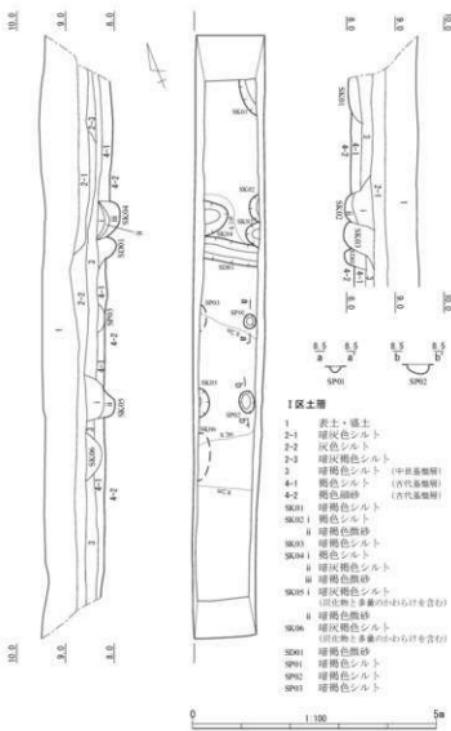


Fig.5 I区平面図及び土層断面図

遺物 1～8 は SK03 出土遺物である。このほか図化できなかった小片も含めて多くのかわらけが出土している。1 は山茶碗の底部で、高台はかなり扁平化している。2～8 はロクロ成形のかわらけで、2 は口径 7.8 cm の小型品、3 は口径 12.0 cm の中型品である。4～8 は底部の破片で、4～6 は中型品、7・8 は小型品とみられる。

9～22 は SK05 出土遺物である。このほか図化できなかった小片も含めて大量のかわらけが出土している。

9 は山茶碗の底部で、高台はほとんど高さを持たない。10 は鉢である。口径 29.2 cm、器高推定 11.7 cm を測る。腰部には回転ヘラケズリが施されている。高台は小型である。

11～22 はロクロ成形のかわらけである。11・12 は中型品で口径は 11 が 12.1 cm、12 が 12.5 cm を測る。13～22 は底部破片で、13～20 は中型品、21・22 は小型品とみられる。

山茶碗や鉢の時期から判断すると、これら SK05 出土の遺物は 13 世紀前半～中頃のものと考えられる。

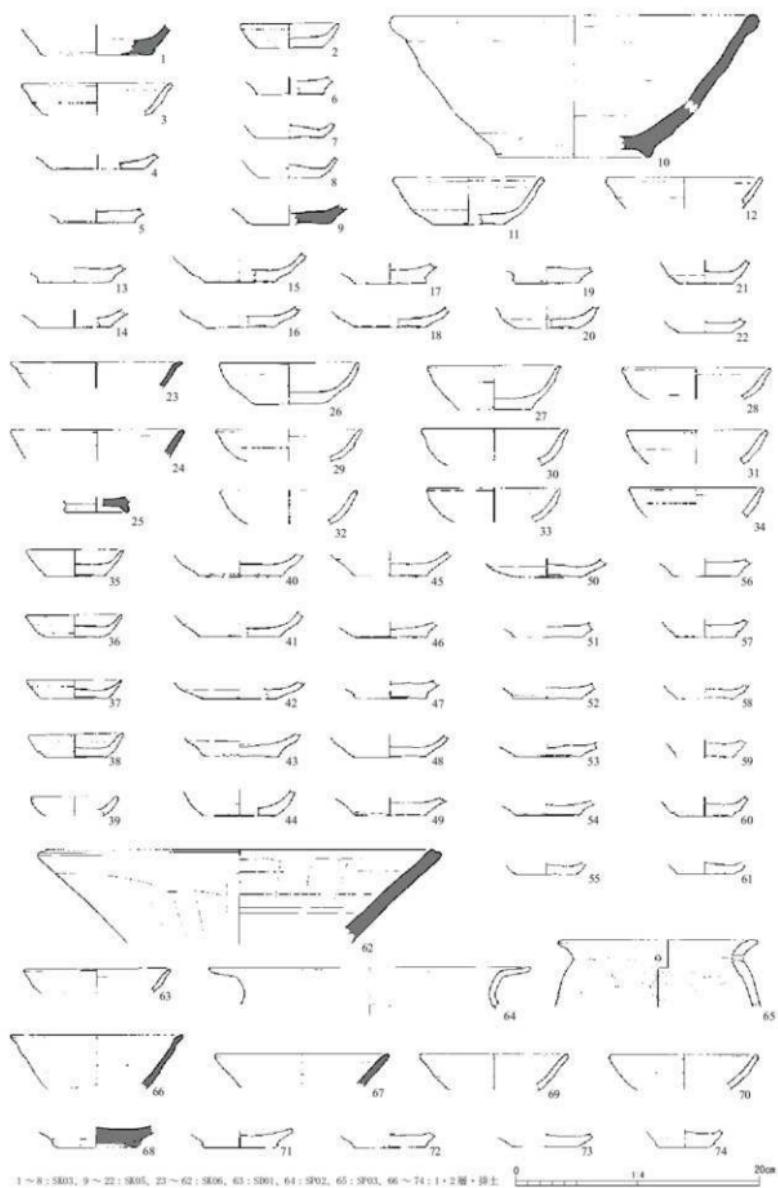


Fig.6 1区の主な出土遺物

23～62はSK06出土遺物である。このほか図化できなかった小片も含めて大量のかわらけが出土している。23は灰釉陶器、24は山茶碗の口縁部、25は灰釉陶器の底部である。26～61はロクロ成形のかわらけである。26～34は口縁部の残る碗状の中型品で、口径は10.6～12.0cmである。35～39は口縁部の残る小型品である。35～38は口径7.6～7.9cmである。39は口径が6.9cmと他より小さく、厚みがあり内湾している。40～61は底部の破片で、40～54は底径5.0～6.6cmを測る中型品、55～61は底径4.3～4.9cmを測る小型品とみられる。62は常滑産の鉢で14世紀後半～15世紀前半頃のものとみられる。SK06出土のかわらけは、灰釉陶器や常滑産の鉢などの遺物を若干共伴するものの、形態がSK03やSK05と同様であり、山茶碗も一定数共伴していることから、13世紀前半～中頃のものと考えられる。

63はSD01から出土したロクロ成形のかわらけであるが、層位的に時期が合わず混入の可能性が高い。中型品で口径11.7cmを測る。64はSP02から出土した土師器の長胴壺の口縁部である。口縁部は大きく開き、口径は26.0cmを測る。8世紀頃のものとみられる。65はSP03から出土した土師器の鉢である。口径15.4cmを測り、頭部には焼成後に穿たれた円形の孔がある。7世紀頃のものとみられる。

66～74は1～2層中や排土中から発見されたものである。66～68は山茶碗で、67は焼成が須恵質である。69～74はロクロ成形のかわらけである。69・70は中型品でいずれも口径12.0cmを測る。71～74は底部破片で、71～73は中型品、74は小型品である。その他に図示していないが、古代の土師器、山茶碗、かわらけ、土師質土器や中世陶器の小片が確認されている。

(2) II区の調査成果

遺構 II区では土坑11基、小穴14基を検出した。中世の遺構確認面は3層上面であるが、古代以前の遺構確認面である4層上面で一度に遺構検出を行った。

SK07は調査区北壁際で確認された。大型の遺構であり大半が調査区外に及んでいるため、溝の可能性も考えられる。灰釉陶器、山茶碗、かわらけが出土している。SK08は3層上面から掘り込まれており、山茶碗とかわらけを出土している。SK09・SK10は調査区西壁際で検出された。SK09がSK10を切っているがいずれも3層上面から掘り込まれており、山茶碗やかわらけを出土している。SK11・SK12は調査区西壁際で検出された。SK11は4層上面から掘り込まれており、須恵器が出土していることから古代の遺構と考えられる。SK12も遺物は出土していないものの、SK11に切られていることから古代以前の遺構と考えられる。SK15・SK16は調査区の南部で検出された。いずれも浅い円形の土坑で、底面に小穴を有する。SK15はかわらけが出土している。SK17は調査区南壁際で確認された。大型の遺構であり大半が調査区外に及んでいるため、溝の可能性も考えられる。埋土には直径5～20mmの円錐を多く含む。かわらけと山茶碗が少量ずつ出土しているもののいずれも小片であり、2層上面から掘り込まれていることから、近世頃の遺構と推測される。

SP04～SP09は調査区北部で、SP10～17は調査区中央～南部でまとまって検出されている。調査区が狹小なこともありますと並びは確認できず柱痕も検出してないが、掘立柱建物の柱穴になる可能性がある。SP04からは山皿が出土している。

遺物 75～77はSK07出土遺物である。75・76は灰釉陶器碗の口縁部破片である。口径は75が16.4cm、76が15.8cmを測る。11世紀代のものとみられる。77はロクロ成形のかわらけの底部破片である。他に図示できなかったが、SK07からは山茶碗、かわらけの小片も若干出土している。

78はSK15から出土した山茶碗の口縁部破片である。口径は15.2cmを測る。13世紀前半頃のもの

のとみられる。

79 は SP04 から出土した山茶碗の小皿で、口径は 8.9 cm を測る。無高台で口縁部は弱く外反する。12 世紀後半～13 世紀初頭頃のものとみられる。

80～87 は 1～2 層や排土中で発見された遺物である。

80～82 は山茶碗で、80 の口径は 16.4 cm を測る。81・82 は高台が扁平化しており、いずれも 13 世紀前半頃のものとみられる。

83～86 はロクロ成形のかわらけである。83・84 は小型品で口径は 8.3 が 8.4 cm、84 が 6.6 cm を測る。85・86 は中型品の底部破片である。

87 は白磁の皿で、口径 10.0 cm を測る。内面および外面の口縁部から体部上半にかけて乳白色の釉薬が施されており、外面の体部下位から底部にかけては施釉されていない。胎土は灰色を呈する。12 世紀後半～13 世紀前半頃のものと考えられる。

その他に小片のため図示していないが、須恵器、山茶碗、かわらけ、土師質土器鍋の小片が確認されている。

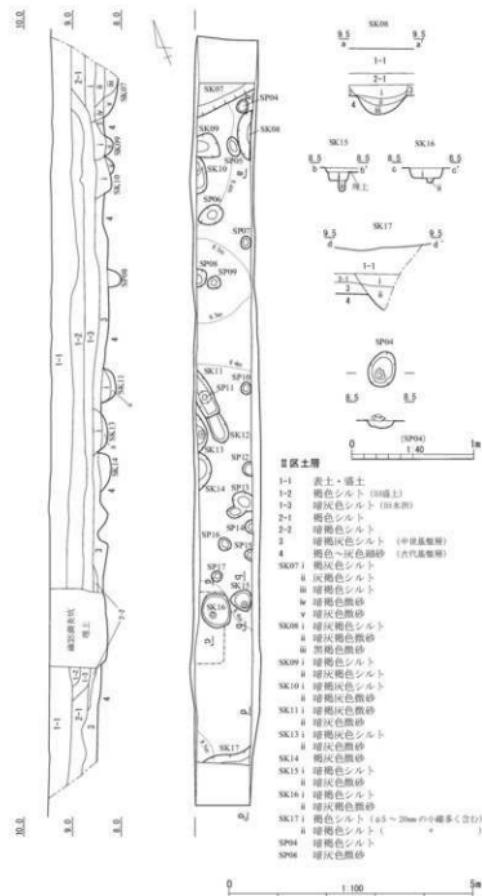


Fig. 7 II 区平面図及び土層断面図

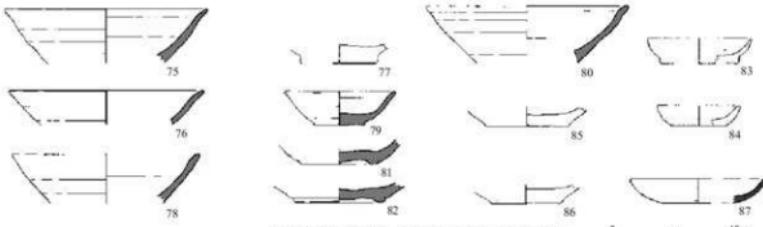


Fig. 8 II 区の主な出土遺物

(3) III区の調査成果

遺構 III区では、土坑4基、小穴11基を検出した。中世の遺構確認面は3層上面であるが、古代以前の遺構確認面である4層上面で一度に遺構検出を行った。なお、3層の暗褐色シルトはやや粘土質の3-1層とやや砂質の3-2層に細分され、3-2層上面から掘り込まれた遺構も確認されている。

SK18・20は調査区北西隅の壁面際で確認された。いずれも3-1層上面から掘り込まれており、SK20がSK18を切っている。SK18はやや不定形である。いずれも小片だが山茶碗と常滑産とみられる陶器甕が出土している。SK20ではいずれも小片だが山茶碗、土師質土器鍋、陶器甕が出土している。また、一部に砥石として使われた痕跡が残る直径15～20cmの円礫が2点出土している。

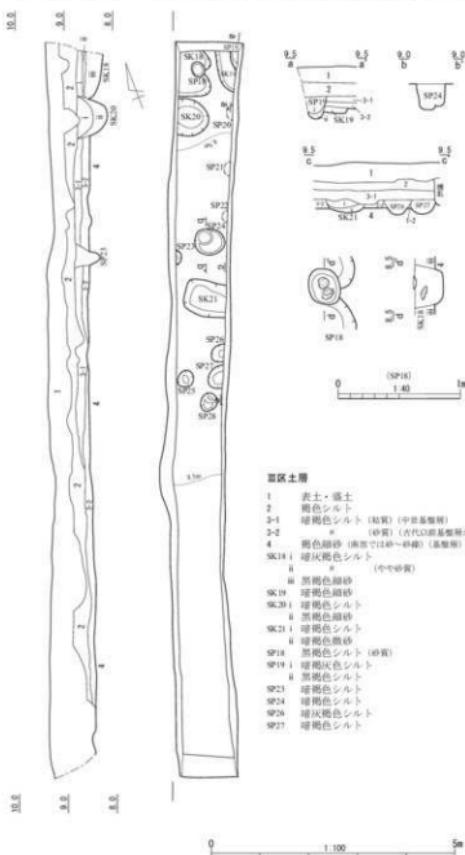


Fig.9 III区平面図及び土層断面図

SK19は調査区北東隅の壁面際で検出された。4層上面から掘り込まれており、古代以前の遺構とみられるが遺物は出土していない。SK21は調査区東壁面際で検出された。3-2層上面から掘り込まれており、山茶碗が出土している。

SP18～28は調査区の北半に偏在している。調査区が狭小なこともありますと並びは確認できないが、掘立柱建物の柱穴になる可能性がある。SP18はSK18を切っている円形の小穴で、直径30cmを測る。山茶碗が出土している。

遺物 88・89はSK21からの出土で、いずれも山茶碗の口縁部である。いずれも13世紀前半頃とみられる。

90・91はSP18から出土した山茶碗の底部である。いずれの高台も小型化しており、13世紀前半頃のものとみられる。

92～97は1～2層や排土中で発見された遺物である。92・93は山茶碗である。いずれも器壁に厚みがありほとんどの外反せず直線的に開く。13世紀中頃のものとみられる。94・95はロクロ成形のかわらけである。94は口径12.1cm、器高3.8cm、底径7.4cmを測り、今回の調査で出土しているかわらけの中型品と比べて底径が大きく口径との差がない。95は底部破片

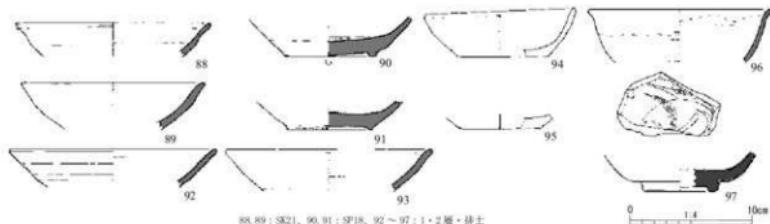


Fig.10 III区の主な出土遺物

である。96は灰釉陶器の碗である。いわゆる玉縁碗で百代寺期のものと考えられる。97は青磁の碗の体部下半～底部の破片で、内面には施文が確認される。高台は断面四角形で高台の接地面から高台内側の底面にかけては無釉である。釉は透明度のある緑色を呈し、胎土は灰白色である。龍泉窯系椀I類に位置づけられ、12世紀後半～13世紀初頭頃のものと考えられる。その他に小片のため図示していないが須恵器、土師器、山茶碗、かわらけ、中世陶器が確認されている。

Tab.2 出土遺物観察表 (1)

回	遺物 No.	調査区	遺構	種別	細別	残存率 (%)	反転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	施成	色調	備考	
6	1	I	SKE03	山茶碗	碗	10	有		8.6	圓	良	灰白色			
6	2	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	80		7.8	2.0	5.2	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	3	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	10	有	12.0			良	にぶい緑色	ロクロ		
6	4	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	10	有			7.5	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	5	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	40			6.1	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	6	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	10	有		5.4	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	7	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	30	有		5.2	圓	良	にぶい緑色	ロクロ。希切削		
6	8	I	SKE03	土師質土器	かわらけ	40	有		5.0	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	9	I	SKE05	山茶碗	碗	20	有		6.0	圓	良	灰白色			
6	10	I	SKE05	中世窯器	片口鉢	30	底部	29.2		12.8	圓	良	灰白色	素面	
6	11	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	30	有	12.1	3.9	5.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	12	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	10	有	12.5			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	13	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	30			5.9	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	14	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	10	有		5.8	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	15	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	30	有		5.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	16	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	30	有		5.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	17	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	40			5.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	18	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	30	有		5.5	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	19	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	40			5.2	圓	良	灰黄色	ロクロ		
6	20	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	20	有		5.0	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	21	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	30	有		4.1	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	22	I	SKE05	土師質土器	かわらけ	40	有		4.1	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	23	I	SKE06	灰釉陶器	碗	10	有	13.7			圓	良	灰白色		
6	24	I	SKE06	山茶碗	碗	10	有	14.0			圓	良	灰白色		
6	25	I	SKE06	灰釉陶器	碗	10	有		5.0	圓	良	灰白色			
6	26	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	60	一部	11.2	3.4	5.3	圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	27	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	40	有	10.6	3.6	5.8	圓	良	にぶい緑色	ロクロ。希切削	
6	28	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	10	有	12.0			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	29	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有	11.8			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	30	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有	11.8			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	31	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有	11.4			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	32	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有	11.0			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	33	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	30	有	10.8			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	34	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有	10.8			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	35	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	60	有	7.9	2.2	4.7	圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	36	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	50	有	7.7	1.8	4.0	圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	37	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	40	有	7.6	1.5	5.2	圓	良	にぶい緑色	ロクロ。希切削	
6	38	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	80		7.6	1.9	4.9	圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	39	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有	6.9			圓	良	にぶい緑色	ロクロ	
6	40	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	40	一部		6.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ。希切削		
6	41	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	40	有		6.4	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	42	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有		6.0	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	43	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	60			5.8	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	44	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	20	有		5.8	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	45	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	50	圓		5.7	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	46	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	40			5.7	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	47	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	30			5.7	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	48	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	30	有		5.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	49	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	40	有		5.6	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		
6	50	I	SKE06	土師質土器	かわらけ	50	有		5.5	圓	良	にぶい緑色	ロクロ		

Tab.3 出土遺物観察表(2)

遺物 No.	調査区	遺構	種別	細別	残存率 (%)	反転	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	胎土	焼成	色調	備考	
6. 51	I	SK06	土師質土器	かづらけ	30		5.4	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 52	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40		6.3	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 53	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40	一透	6.2	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 54	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40		5.0	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 55	I	SK06	土師質土器	かづらけ	70		4.9	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 56	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40	一透	4.9	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 57	I	SK06	土師質土器	かづらけ	50	有	4.8	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 58	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40		4.5	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 59	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40		4.5	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 60	I	SK06	土師質土器	かづらけ	70		4.3	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 61	I	SK06	土師質土器	かづらけ	40		4.3	黒	良	にぶい褐色	ロクロ			
6. 62	I	SK06	中空陶器	口跡	10	有	31.5	黒	良	灰黄褐色	常陸9型式、15世紀前半か			
6. 63	I	SD01	土師質土器	かづらけ	10	有	11.7	黒	良	西黄褐色	ロクロ			
6. 64	I	SP02	土師質土器	長脚壺	10	有	26.0	黒	良	にぶい褐色	8世紀頃か			
6. 65	I	SP03	土師質土器	小型鉢	20	有	15.4	黒	良	にぶい褐色	6-7世紀。焼成後單孔。ハケ箇毛ガタ			
6. 66	I	捷土	山茶輪	輪	10	有	14.0	黒	良	灰褐色				
6. 67	I	捷土	山茶輪	輪	10	有	14.0	黒	良	灰褐色				
6. 68	I	捷土	山茶輪	輪	10	有	14.0	6.2	黒	良	灰褐色			
6. 69	I	捷土	土師質土器	かづらけ	10	有	12.0	黒	良	西黄褐色	ロクロ			
6. 70	I	捷土	土師質土器	かづらけ	10	有	12.0	5.8	黒	良	西黄褐色	ロクロ		
6. 71	I	捷土	土師質土器	かづらけ	20			5.5	黒	良	にぶい褐色	ロクロ		
6. 72	I	捷土	土師質土器	かづらけ	30			5.2	黒	良	西黄褐色	ロクロ		
6. 73	I	捷土	土師質土器	かづらけ	10			4.2	黒	良	西黄褐色	ロクロ		
8. 74	I	捷土	土師質土器	かづらけ	10			6.0	黒	良	灰白色			
8. 75	B	SK07	灰陶器	輪	10	有	16.4	黒	良	灰白色				
8. 76	B	SK07	灰陶器	輪	10	有	15.8	8.7	黒	良	灰白色			
8. 77	B	SK07	土師質土器	かづらけ	40			6.0	黒	良	にぶい褐色	ロクロ、赤切痕		
8. 78	B	SK15	山茶輪	輪	20	有	15.2	黒	良	灰白色				
8. 79	B	SP04	山茶輪	山腹	80		8.9	2.8	3.9	黒	良	灰白色		
8. 80	B	1-8号	山茶輪	輪	20		16.4	黒	良	灰白色				
8. 81	B	1-8号	山茶輪	輪	20	有		6.0	黒	良	灰白色	赤切痕		
8. 82	B	1-8号	山茶輪	輪	20	有		7.0	黒	良	灰白色			
8. 83	B	捷土	土師質土器	かづらけ	10	有	8.4	2.1	6.2	黒	良	にぶい褐色	ロクロ、新土に雲母含む、赤切痕	
8. 84	B	捷土	土師質土器	かづらけ	20	有	6.6	1.7	4.4	黒	良	にぶい褐色	ロクロ	
8. 85	B	捷土	土師質土器	かづらけ	30			6.6	黒	良	にぶい褐色	ロクロ、赤切痕		
8. 86	B	捷土	土師質土器	かづらけ	30			5.7	黒	良	西黄褐色	ロクロ、新土に雲母含む		
8. 87	B	1-8号	貿易陶器	白磁器	10		10.9	赤	良	灰				
10. 88	III	SK21	山茶輪	輪	10	有	15.8	黒	良	灰褐色				
10. 89	III	SK21	山茶輪	輪	20	有	14.8	黒	良	灰褐色				
10. 90	III	SP18	山茶輪	輪	6	一透		7.2	黒	良	灰白色	高台輪		
10. 91	III	SP18	山茶輪	輪	40			6.7	黒	良	灰白色	赤切痕、高台輪		
10. 92	III	1-8号	山茶輪	輪	10	有	16.8	黒	良	灰白色				
10. 93	III	1-8号	山茶輪	輪	20	有	16.6	黒	良	灰白色				
10. 94	III	1-8号	土師質土器	かづらけ	40	有	12.1	3.8	7.4	黒	良	にぶい褐色	ロクロ、新土に雲母含む	
10. 95	III	捷土	土師質土器	かづらけ	10	有		6.0	黒	良	にぶい褐色	ロクロ		
10. 96	III	捷土	灰陶器	輪	10	有	15.0	黒	良	灰白色				
10. 97	III	捷土	貿易陶器	青釉輪	30	有		5.6	黒	良	灰白色	擬圓周率I類		

Tab.4 遺構観察表

調査区	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	調査区	遺構名	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)
I	SP01	(90)	(36)	20	II	SP08	35	(17)	20
I	SP02	(110)	(29)	58	II	SP09	30	25	22
I	SP03	(96)	(27)	64	II	SP10	27	19	11
I	SP04	(80)	(48)	96	II	SP11	26	26	21
I	SP05	96	(29)	64	II	SP12	34	(19)	26
I	SP06	98	不明	31	II	SP13	60	(50)	22
I	SP01	(120)	46	30	II	SP14	27	(13)	16
I	SP01	28	24	11	II	SP15	22	(14)	17
I	SP02	45	28	18	II	SP16	27	23	23
I	SP03	(56)	不明	14	II	SP17	22	21	21
II	SK07	(140)	(115)	70	II	SK18	(100)	66.0	54
II	SK08	124	(26)	60	II	SK19	(79)	(43)	12
II	SK09	(94)	(48)	44	II	SK20	(86)	62.5	60
II	SK10	(90)	(19)	40	II	SK21	(90)	70	26
II	SK11	(92)	25	42	II	SP18	32	26	24
II	SK12	(61)	32	9	II	SP19	(46)	(14)	23
II	SK13	97	(23)	30	II	SP20	21	(17)	28
II	SK14	80	(24)	26	II	SP21	31	4.9	30
II	SK15	45	40	29	II	SP22	(24)	不明	4-5
II	SK16	79	58	20	II	SP23	(46)	(12)	50
II	SK17	(104)	(90)	172	II	SP24	59	51	40
II	SP04	28	20	6	II	SP25	36	33	20
II	SP05	43	23	8	II	SP26	35	(24)	30
II	SP06	82	38	19	II	SP27	41	(29)	31
II	SP07	26	(19)	4	II	SP28	35	31	23

※ () 内は現存規模

第3章 総括

今回の東畠屋遺跡4次調査は、僅かな面積であったが土坑21基、構1条、小穴28基と多くの遺構が検出された。また、13世紀前半頃を主体とするかわらけや山茶碗を中心とした遺物が出土した。以下に特筆すべき点等を記することで総括としたい。

1 出土かわらけについて

出土状況 I区において、近接するSK03・SK05・SK06から13世紀前半頃とみられるかわらけが一括で出土した。かわらけの一括出土については、非日常的な儀式や饗宴等の際に使い捨ての器として用いられた後、まとめて投棄されたものと考えられており（鈴木康2002など）、今回の例についても、そうした非日常的行為が行われていた可能性を示すものとして注目される。

特徴 今回出土したかわらけは、全てロクロ成形である。全体復元できる個体は少ないが、口径11～12cm、器高3.5cm前後の中型品と、口径7～8cm、器高1.5～2cm程度の小型品に大別できる。これらのかわらけは、色調や胎土なども含めて斎一性が高いことから、同一の場所で生産されたものが大半と考えられる。西三河地域のロクロ成形かわらけについては、瀬戸や常滑など山茶碗生産の関与が指摘されており（尾野1994）、当遺跡出土のかわらけも、製作地は不明ながら山茶碗生産に関わってもたらされた可能性も考えられる。

なお、当遺跡のかわらけは、過去の出土品も含めて全てがロクロ成形であり、本遺跡を特徴づけるものといえる。一方で、天竜川平野北部に位置し鎌倉時代を主体とする中屋遺跡では、非ロクロ成形品が主体であり（静埋研2009など）、非ロクロ成形品のみが一括で出土する土坑も確認されている（浜松市教委2019）。西遠地域における戦国時代のかわらけについては、非ロクロ成形品とロクロ成形品の比率の差異が、遺跡の性格や地域によって生じているとの指摘がなされており（鈴木一2002・2009）、鎌倉時代においても同様に遺跡の性格や地理的状況による差異が認められるのか、あるいは時期差によるものなのか、今後のさらなる類例の増加が待たれる。

また、これまで遠江における中世のかわらけ編年（松井2005など）では、13～14世紀代の資料が乏しく不明瞭であったが、今回の一括出土例は、当地域におけるかわらけの編年研究を進める上で良好な資料となるであろう。

2 集落の様相

集落の立地状況 遺跡範囲の南西端における1次調査では、調査区南部で河川跡が確認されたほか、今回の調査に先立ち行われた確認調査（3次調査）でも、遺跡範囲の北西端において小河川の跡とみられる帶状の低地が確認されており、北東から南西方向に流れる2本の河川に挟まれた中洲状の微高地に集落が展開していたことがうかがえる。

集落の性格 当地域において中世前半に出土する主要な供膳具は山茶碗であり、かわらけがまとまって出土する遺跡は限られる。今回のようなかわらけの一括廃棄の事例は、城館跡や寺社等において広く知られており、13世紀代の当地域における数少ない事例の中においても、大型の方形区画溝を有し寺院や有力者層の存在がうかがえる浜北区根堅の中屋遺跡や、蒲御厨内における有力者

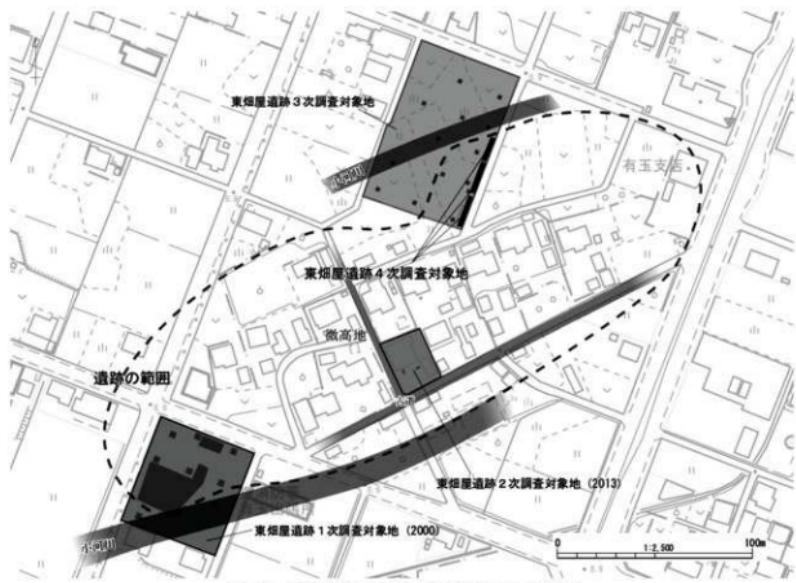


Fig.11 東畠屋遺跡における発掘調査と周辺の地形

の存在が想定されている南区渡瀬町の上組遺跡（浜文振 2011）などで、一定数のかわらけがまとまって出土している。当遺跡においても、貿易陶磁の出土や 1 次調査で検出した方形区画溝の存在などを踏まえると、有力者の屋敷地や寺社など一定の権力を有する勢力が集落内に存在していた可能性を考えられるが、遺跡の中心部と目される既存集落内部での調査がほとんど行われていないため、現時点においてその詳細は不明といわざるを得ない。

今回の調査成果を踏まえても、当遺跡での調査例はいまだ乏しく遺跡の全体像は不明瞭である。また、今回出土したかわらけについても詳細な検討が行えていない状況である。今後の丹念な調査研究の積み重ねによって東畠屋遺跡の様相が明らかになっていくことを期待したい。

引用文献

- 尾野善裕 1994 「生焼け山茶碗と土師器皿」『考古学フォーラム』4
- 財團法人静岡県埋蔵文化財調査研究所ほか 2010 『中岳遺跡』
- 鈴木一有 2002 「戦国時代にかかる諸問題」『恒武西宮遺跡』(財)浜松市文化協会
- 鈴木一有 2009 「北神宮寺遺跡における中近世の道構について」『北神宮寺遺跡』(財)浜松市文化振興財团
- 鈴木康之 2002 「中世土器の象徴性――「かりそめ」の器としてのかわらけ」『日本考古学』第 14 号
- 浜松市教育委員会 2015 『平成 25 年度 浜松市文化財調査報告』
- 浜松市教育委員会 2019 『平成 29 年度 浜松市文化財調査報告』
- 財團法人浜松市文化協会 2001 『東畠屋遺跡』
- 財團法人浜松市文化振興財团 2011 『上組遺跡』
- 松井一明 2005 「中世見付とその周辺」『陶磁器から見る静岡県の中世社会』菊川シンポジウム実行委員会



1 調査区全景（北から）



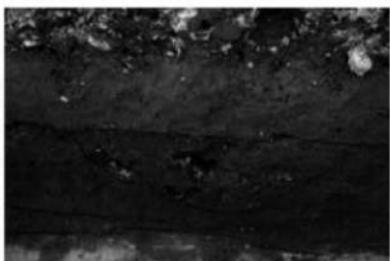
2 調査区全景（南から）



1 I区全景（北から）



2 SK05 土層堆積状況



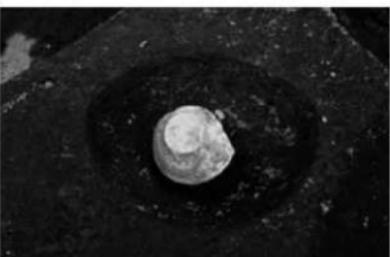
3 SK06 土層堆積状況



4 II区全景（北東から）



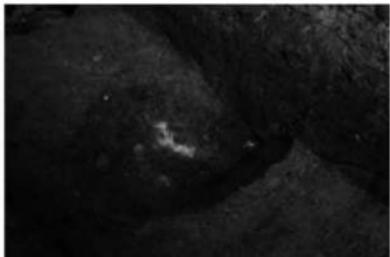
5 SP04 遺物出土状況



6 SP04 遺物出土状況



1 III区全景（北東から）



2 SK21（南西から）



3 SP18 遺物出土状況（南東から）



4 主要出土遺物

PL.4



出土遺物

報告書抄録

書名（ふりがな）	東畠屋遺跡2 -4次調査の成果- (ひがしはたやいせき2 - 4じちょうさのせいか-)							
編著者名	鈴木京太郎							
編集・発行機関	浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行） 浜松市市民部文化財課 〒430-8652 浜松市中区元城町 103-2 TEL (053) 457-2466 FAX (050) 3730-1391							
発行年月日	2019年3月29日							
ふりがな 遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
東畠屋遺跡	静岡県 浜松市 東区 有玉南町 1284-1 外	22132	02-01-37	34 度 45 分 19秒	137 度 44分 59秒	2018年 10月22日 ～ 10月29日	60.5 m ²	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
東畠屋遺跡	集落	古墳時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代		土坑 溝 小穴		須恵器、土師器、 灰釉陶器、山茶碗、 土師質土器、 貿易陶磁器	13世紀前半～中頃を主 体とした遺構、遺物を 確認	
要 約	東畠屋遺跡は静岡県浜松市東区有玉南町に所在する古墳時代後期～中世の遺跡である。遺跡は天竜川沖積平野に形成された細長い中洲状の微高地に立地している。今回の4次調査では、鎌倉時代前半の遺構・遺物を主体とし、土坑 21 基、溝 1 条、小穴 28 基を検出した。出土遺物は、山茶碗と土師質土器皿（かわらけ）を主体とし、須恵器、土師器、灰釉陶器、中世陶器（常滑産等）、貿易陶磁器（白磁、青磁）も出土している。 特筆すべき事項としては、当地域において出土例の少ない鎌倉時代のかわらけが一括投棄された土坑（SK03、SK05、SK06）を確認したこと、そのかわらけは全てロクロ成形によることが挙げられる。							

東畠屋遺跡2

～4次調査の成果～

2019年3月29日発行

発 行 浜松市教育委員会
印 刷 中部印刷株式会社

Higashihataya Site

The 4th Excavation Report

A Report of Archaeological Investigation
in Western Shizuoka Prefecture,Japan



March,2019

Hamamatsu Municipal Board of Education